乙女小学校 学校だより 第１０号　　発行日 令和　７年　１月１７日（金）

たんぽぽ

発行者　川村　克彦

報道から・・・教育について考える

３年ほど前ですが、東京の私鉄で刃物を振り回した３０代後半の男は「幸せそうな人間を見ると殺したくなった、自分だけがみじめなんて許せない。」と述べていました。恐ろしい事件ですが、「教育」に携わってきた人間としてみると残念な事件です。「教える」というのは一応簡単なことです。必要な情報さえもっていればいいので誰にだってできます。ただ、情報を知っている事が重要なら、東京大学出身など一流大学と言われる方たちが教員になれば素晴らしい人間（大人）になるはずです。でもこれからは、以前のように教科書の中身を先生がかみ砕いて丁寧に教えるということではありません。ご存じのようにこれを行っても全員が素晴らしい人間になっていくわけではありませんし、そのやり方だとすぐ後のテストは少々できたにしても教えられるので頭には残らず、数週間後にはほぼ忘れているということがわかっています。人に教えられるとあまり記憶に残りませんが、教え（説明す）るがわにたつと格段に覚えているというのがわかってきました。授業も今、そのように変革しています。まず自分で必ず考え、子どもたちが説明して解決していく。それがアクティブラーニングといわれるものです。

ただ、「教育」とは、「教える」だけでなく「育てる」こともあるので大変です。育てることは、これからの厳しい人生を生き抜く資質・能力を育てることであるからです。これからの人生大変だからと言うだけでは人の心には響かないし、それでわかるのであれば、この情報化社会の中、学校教育はいらないのかもしれません。「行事で育てる」といつも言っていますが、「教える」ことと「育てる」ことは別の側面があります。「少々の苦労を味わわせる。」「少々の挫折を味わわせる。」ことは、学校（教師）にとってのウデの見せどころの一つであると考えています。以前の「たんぽぽ」でもお知らせいたしましたが、「ちょっと苦労して頑張ってみる」こと。楽な人生や挫折のない人生なんてありえないので、子供時代になまじっか順風満帆の生活を送ったりしたら大変だからです。宿題を忘れ怒られたり、宿泊学習で仲間と対立したり、水たまりにはまるたびにキレていたら身がもちません。先述の報道の男も、学齢期にもっと多くの苦労やプチ挫折体験があったならと教育者としては悔やまれてなりません。人生なんて決してプログラミングできないことに気づかせる機会が、学校にもこの男性の保護者にも用意されていたらと思えてなりません。

以前私が５年生を担任していた時に、あるスポーツ番組に出場し３位となり、子供たちは悔しくて泣きじゃくりました。挫折を味わったのです。やらないと勝てないとわかったのです。その後６年時にも出場し、そのための練習をまさにみんなで死に物狂いで行っていました。ダントツで優勝しました。だからその子たちは中学校で勉強も頑張るとともに、ほぼ全部活動が県大会出場となるくらい頑張りました。今はその子たちも社会人。今でも努力して頑張ってくれていると信じています。でも「教育」がうまくいったかの結果は、その子たち一人一人が自分の人生の終末を迎えるまで出ないことはわかっています。